『幼児の教育』と私

私の「幼児の教育」時代

佐藤　和代

いつも仕事をもらっている某女性向けパソコン雑誌から「次号は家族新聞をとりあげます」との連絡がはいりました。

打合わせに出向くと、まずはこれを見て下さい、と大きな机いっぱいに広げられたのが、読者から届いた家族新聞の山。うわー、こんなにあるの。どれも写真いっぱい、イラストいっぱい、色とりどり。

「人気あるんですよ、パソコンで家族新聞作るのって。でもねえ、内容はねえ……」。ぱらぱらと手にとると、ほとんどは我が子の成長をしるした新聞で、「やった！　○○くん、とうとう寝返

りをうちました！」とか、「発表会で〇〇の役をやりました！」とか、こんな話題でフルカラー印刷するかあ？　と苦笑してしまうようなもの。一枚二枚でしたらほほえましいんですけれど、山のように目を通さなければならないとなると、編集者たちはうんざり顔。

「これでいいんです。子育て中に出す私的な新聞なんて、ほかに何を書くんですか。ぜひ親バカ中心の特集でいきましょう」と思わず弁護側にまわる私。だって、私も作っていたもの。最初の子が生まれてすぐ家族新聞を作りはじめて、二番目の子が生まれる頃には、あろうことか伝統と格調の高さで知られた（？）『幼児の教育』に子育て日記の連載をはじめ、えんえんと六年も「うちの子がね～、寝返りしてね～」的な日記を垂れ流していたのですから。

わかってはいたんです、読んでも苦笑するだけの人だって多いだろうなってことは。でも、どっ

ぷり子育てにつかっている時代は、子どもがああしたこうしたという話が頭のほとんどを占めています。頭のどこかでこれではいけない、もっと社会に目を向けようなんて思いつつも、どうもあらがえない。

*

子育ての中の家庭の中には、ちょっと世間とは別の時間が流れます。職場ではテキパキ仕事をしているお母さんでも、家に戻ると幼児番組を見ながら一緒に踊ったりしているのでしょうね（というのは単なる想像で、うちだけだったかもしれない）。

育児日記を連載していたころ、一度書きたいと思いながら書けなかったテーマがあります。それは「子どもを迷惑がるそっち側が変だ！」という話。そっち側というのは、大人だけの論理でものを言う側ですね。ふたこと目には「しつけがなっていない」「今の母親は子育てがへただ」と言い、新聞に投書なんかする人たち。

そういう投書に反論するというのは、家族新聞ならともかく、雑誌上ではちょっとはばかられてやめておいたんですが、『子育てにどっぷり』時代の親の目から見ると「そっちが変よ」と言いたくなることって多いんです。「病院の待合室で子どもがうるさい」という声。ただでさえ病気で機嫌の悪い子が、こんなに待たされて、おとなしくしてられると思うの？　「電車のホームで子どもを叱りつける親。叱るくらいならちゃんと手をつなげ！」という声。わかっていても片手に下の子、片手に荷物だったりするんですよ。

だいたい、まわりに子どもの影も形もないという社会って変なのでは？　大人のまわりにはうろうろと子どもがいるのがあたりまえでしょ、人口

の比率から言っても。それがどうして、ビジネス街には子どもがいないの？　そういうところにばっかりいるから、子どもの粗野なところが許せなくなるんじゃないの？　それが効率第一主義につながって、社会を閉塞させているんじゃないの？

＊

私は子どもを育てていなかったら、たぶん『そっち側』の論理しかわからなかった。幼児のいる家庭という『こっち側』にどっぷりつかって、はじめて見えてくるものってあるんですね。

今はまた大人だけの社会に戻りつつある私。子どものいない都心で効率よく仕事をすすめ、『子連れお断わり』の喫茶店でくつろいだりもします、すいません。

でも、家の中に幼児がいた頃に感じていたことはちゃんと形をとどめていて、あまり効率主義に

おちいりそうなときには、ピコーンピコーンとウルトラマンの警報が鳴り、アンパンマンのテーマ曲が頭をかすめます。あんまり、そっち側へ行き過ぎないでねと。

*

今まさに『我が家の幼児の教育時代』にある方たち、家族新聞でも日記でも、書き残しておきませんか。たぶん「我が子が寝返りをうった？　それがどうした」と言われるでしょうけど。でも、そんなことの書ける時代は、けっこうすぐに過ぎていってしまう。そして、忘れてしまうにはあんまりにもったいない時代だと思います。自分のためにも、大きくなったら読んでくれるであろう子どもたちのためにも、何か残っていると楽しいです！

しかしこれは、かなり言い訳っぽいかも…。

連載していたころの日記を一冊の本にしていただいたので、ときどき自分でも開いてみます。だいたいは「あ、親バカしてるな」と赤面してすぐ閉じてしまいます。家族新聞をすすめるのは、ひとりじゃ恥ずかしいから仲間になってよ、という理由だったりして。どうも、失礼しました。

（フリーライター）